

安藤広太郎小論

—人間形成の軌跡を辿る—

児童教育学科 教授 山本 悠三

Comment on The Life of Hirotarou Andou —Clear The Process of Human Building—

Yuzo Yamamoto

はじめに

詳しい経歴については後述するとして、安藤広太郎（1871～1958年）は明治28（1895）年7月帝国大学農科大学（→東京帝国大学農学部→現東京大学農学部）を卒業し、同年10月農商務省農務局管轄下の農事試験場（以下国立農事試験場とする。現農業環境技術研究所）に勤務した。その年から退官する昭和16（1941）年1月まで約46年間在職し、大正9（1920）年9月から退官までの21年間同場の第3代場長を勤めた。場長在職中に九州帝国大学農学部、東京帝国大学農学部の教授を兼務し、昭和31（1956）年文化勲章を授与された。安藤はその経歴に照らし合わせてみても農学史に1頁を、いやそれ以上の枚数を費やして記録されるに値する人物であるといえよう。

しかし、『横井博士全集』全10巻（大日本農会 1927年）に纏められるほどの業績を残し、東京農業大学の創設にかかわった横井時敬（1860～1927年）。或いは足尾鉍毒事件の告発や第2代の国立農事試験場長、第10代の東京帝国大学総長を勤めた古在由直（1864～1934年）に比べて、存在感の薄さは否めない。そこで、安藤の経歴を辿りながら、国立農事試験場での安藤の事績を跡付けるとともに、前稿「国立農事試験場制度の成立」で論じた老農に関する見解に若干の修正を加えておきたい。

1、農学研究への道程

（1）安藤広太郎の略歴

人物研究の俵いからまずその経歴を明らかにしておきたい。安藤の経歴や記録に関しては『日本古代稲作史研究』（農林協会 1959年）所収「老農学者の回顧」及び「安藤広太郎先生略歴」、『安藤広太郎回顧録』（日本農業研究所 1968年）、農業発達史調査会編『日本農業発達史—明治以降における—』5巻（中央公論社 1978年）所収「農事試験場の設立前後—安藤広太郎博士の語る—」に詳しい。そこでそれらに依拠しながら述べていくことにしたい（上記の文献からの引用が頻繁なため、それぞれ『稲作史』p1、『回顧録』p1、「設立前後」p670等のように表示する）。

安藤は明治4（1871）年8月、兵庫県氷上郡柏原町（現丹波市）に安藤久次郎、ゆきの長男として生まれた。曾祖父母、祖父母ともに実子がなかったため、祖父の甥にあたる久次郎が谷家から養子に入った。安藤は3代目にして生まれた実子ということになり、祖父母、両親の「悦は一方ならぬものであつた」（『稲作史』p227）といわれている。安藤家のルーツは藤原氏に始まるとのことであるが、墓碑が300年前のものであることから、藤原氏の時代（つまり平安時代）にまでは溯らないとしても「相当永続せる家系」（『稲作史』p223）であったことは確かである。

「老農学者の回顧」には父の久次郎の動向が記されている。それによれば久次郎は製油業や家業である荒物屋の事業を拡大するとともに、明治12（1879）年に郡役所が設置されると戸長も勤めた。その他の履歴は省略するが、一つだけエピソードを紹介しておくと、明治23（1890）年に実施された第1回の衆議院議

員選挙に水上郡長の田艇吉が立候補した。久次郎は選挙参謀の一人として応援したが、久次郎は戸長を勤めたことと併せて、その頃政治的な活動に興味を示していたようである。この選挙で田艇吉は落選したものの、後に衆議院議員となる。田家は先祖代々大庄屋を勤めた豪農で、この地方の名望家であった。田艇吉の弟が台湾総督や枢密院顧問官を勤めた田健治郎である。

安藤のその後の経歴を辿っていきたい。安藤は明治18(1887)年9月水上郡立高等小学校を卒業する。安藤は当初それまで通学していた小学校に併設されていた高等小学校に通っていたが、同年4月同校が新設されたためそこに転じることになった。安藤は同校には卒業するまでの半年間通学したことになるが、新校舎は「二階建の堂々たるものにて田舎には珍しいものであり、加えて「遠方よりの生徒の為男女各寄宿舍」が設置されていた(『稲作史』p230)。

父の久次郎は向学心が旺盛であったが、家庭の事情で学業の継続が困難であった。そのこともあって子供たちの教育には熱心で、安藤には小学校在学中在地の専門家たちに依頼して、学校教育とは別に漢籍や日本史の学習をさせていた。所謂家庭教師を付けていたのである。高等小学校を卒業すると安藤は親子ともども上級の学校への進学を希望していたため、中学校への進学を目指すことになる。

ところが、当時兵庫県には一つの中学校も設置されていなかった。中学校に相当する教育機関としては、多紀郡の篠山(現篠山市)に軍人の養成を目的とした鳳鳴義塾があり、江戸時代から続く漢学塾が県下の「至る所に」あった。しかし、いずれも安藤にとって関心を示す進学先ではなかった。また、その頃はまだ「数年を要する学業のため」遠方に出ていくこともめったになかった。それは交通の便が悪く、徒歩で柏原から篠山→古市→三田を通して京都や大阪まで行くのに2日を要したこと。そして、学費も「当時の米価(1石3、4円)を以てしては毎月1石以上を充当せざるべからざる」ためであった(『稲作史』p234)。

ちなみに、摂津国の三田は国立農事試験場の初代場長を勤めた沢野淳の生地でもある。沢野家の出自は九鬼藩の城代家老であったが、沢野は温厚な性格に加え、「徹頭徹尾素朴主義であつた」(『農業発達史資料』4号「略歴と事績」p4 1950年)といわれている。後の明治29年か30年頃のことであるが、国立農事試験場に勤務していた安藤が冬休みに帰省することになった際、沢野も帰省するところであった。そこで、沢野は途中で自身の家に泊まるように勧めたため、安藤は一泊することになった。沢野の実家は「高い所にある大きな家で、周囲は白壁の塀であつた」(『稲作史』p328)ことから、その頃の沢野家は旧家の趣を備えていたことになる。

ところでそうした状況にあっても、勉学の欲求を抑え難かった安藤は、大阪中学校への進学を決意する。それは柏原の隣村に位置する新屋に在住の土田卯之助が同校に在学したことがあったためである。そこで安藤は土田を尋ねて相談したところ、土田から「大に勧誘せらるる所が」あった。

大阪中学校は明治18年に大学分校、明治19年4月に第三高等中学校と名称を変更するが、明治の始めの頃の大阪には大阪中学校のほか舎密局、洋学校開成所、英語学校等が設置されていた。大学分校は大阪中学校と舎密局、洋学校開成所等を統合して再編したものである。そして、第三高等中学校に改称後本科は2年、予科は3年となり、予科の下に予科補充科が設置された。安藤は当初予科補充科の1年を受験する予定であったが、予科補充科1年の募集がなかったため2年に出願した。それは安藤にとって「冒険を試みんと決心」するほどの覚悟であった。というのは予科補充科の2年は1年と異なり、「相当難関」であったからである。

安藤は明治19年9月首尾よく予科補充科の2年に合格したが、安藤が一番苦勞した科目は英語であった。教科書のレベルが高く、表題の「ザ・サウザン・フォレスト」からして何を意味しているのか分からなかった。また、パーレーの万国史も「わかりはしない」ため、「しかたがな」く「万国史の直訳を買ってきてそれと首ッ引きで読んだ」とのことである(『回顧録』p10)。

翌明治20年の春になると折田彦市が校長に、松井直吉が教頭にそれぞれ就任する。折田彦市(1849～1920年)は薩摩国の出身で第三高等中学校(明治27年から第三高等学校に改称)の校長を長く勤めたほか、

大正4(1915)年から教化団体の一徳会(明治41年創立、本部は京都)の代表に就任する。

また、松井直吉(1857~1911年)は美濃国大垣藩の出身で大学南校を卒業した。明治14(1881)年東京大学理学部教授、明治19(1886)年帝国大学工科大学(→東京帝国大学工学部→現東京大学工学部)教授を経て、明治20年に第三高等中学校に赴任した。その後、明治23(1890)年に駒場農学校の後身にあたる東京農林学校が帝国大学に農科大学として併合されると、その初代学長(学部長に相当する)となる。松井の就任事情については本筋から離れるため省略するが、横井時敬「嗚呼学長松井直吉君」(『横井博士全集』5巻所収 p56~p60 1927年)に経歴が詳しい。松井はさらに明治38(1905)年、第7代の東京帝国大学総長に就任する。総長は就任後すぐに辞職するが、農科大学長は死去する明治44(1911)年まで勤めた。その経歴が示すように、松井と安藤はこの後深いかわりを持つことになる。

安藤は予科補充科を卒業すると、そこからさらに予科に進学した。その後明治22年9月になると第三高等中学校は大阪から京都へ移転する。安藤は明治23(1890)年9月に本科の1年に進み、第二部(理科コース)に在籍する。

翌明治24年の夏、安藤にとって一つの転機が訪れる。帰省中の安藤に対して父の久次郎は電信関係の業務に携わるようにとの希望を伝えた。安藤はその頃応用化学を専攻するつもりであったためその申し出を断ったが、さりとて化学工業方面の「見通しも出来難」く将来も「不明であ」った。さらに、卒業後郷里に戻ることも想定していたが、そうであれば帰郷後に「多少でも役に立つ学問」として農学が視野に入ってきた。安藤は農学こそが自身の家庭環境からいっても、唯一大学進学への理解を取り付けることの出来る専門にほかならないと考えたのである。

だが、当時第三高等中学校には農科大学に進学するための課程が設置されていなかった。そのため、前年の明治23年既述したように、東京農林学校を母体として設置された帝国大学農科大学の予科への転学が必要となった。そこで安藤は校長の折田を尋ね事情を説明したところ、折田は農科大学の予科への転学に理解を示し、農科大学長に栄転していた松井に便宜を計って貰うことを約束した。

松井の仲介の労もあつたと思われるが、帝国大学農科大学予科4年への転学が認められると、安藤は明治24年9月に上京することになった。そして、在学中の保証人を田辺輝実と田健治郎に依頼した。田は先に述べたように、父の久次郎が選挙参謀を勤めた田顕吉の弟である。安政2(1855)年の生まれであるから、この時36~7歳であった。上京後神奈川県や埼玉県等地方の警察畑を歩き、明治23年に成立した第1次山県有朋内閣の逋信大臣を勤めていた後藤象二郎に見いだされ、中央官界への道を昇り始めていた頃である。田辺の詳しい経歴は不明であるが、この後安藤は学業の継続が困難な局面にあった際、田辺から多大な恩恵を蒙ることになる。また、安藤が帝国大学農科大学の2年に在学中九州に旅行に出掛けた際、佐賀県知事をしていた田辺を尋ねていることから(『稲作史』p279)、田辺も官界で活躍した人物であったと思われる。

駒場(東京府荏原郡上目黒村地内駒場野)にあった帝国大学農科大学は帝国大学傘下の他大学(他学部に対応する)に比べて「一段低きものの様な感じが一般に持たれて居たことは争われない事実であり、安藤は在阪の頃に「東京農林学校であれば一年早く学士になれる」との噂を聞いていた(『稲作史』p259)。安藤はその駒場に通学するようになるが、校舎は明治10年代に建てられたもので、室内の掃除も行き届かず、学生は下駄履きのまま出入りしていた光景を見るにつけ、本部のある「本郷と比べると雲泥の違い」があり、「一体の空気がどうも駒場を特殊学校扱いにしている」との感想を抱き(『回顧録』p11)、「大阪、京都で兎に角教室は勿論寄宿舎でも一応の秩序、訓練を経て来た予には非常に乱雑感が深かつた」との印象から(『稲作史』p261)、上述の噂も的外れではなかったように思われたのではなかろうか。

明治25(1892)年9月、安藤は学力検定にパスすると予科を卒業して、帝国大学農科大学農学科の1年に進級することになる。農学科在学中興味を示した科目としては、石川千代松の進化論や池野成一郎の植物学実験等であった。特に植物学実験は「性に合うたというのか面白く感じて可なり勉強した」(『稲作史』

p267) とのことである。その反面、動物学実験では解剖実習に拒否反応があり、授業は欠席することが多かった。

講義内容以上に安藤が気掛かりであったことは、教授は全員他大学(他学部に対応する)の出身者で、農科大学出(というより実質的には前身の駒場農学校、東京農林学校出)は全員助教(助教授に対応する)であったことである。しかも、教授は「いずれも純粹の理学を専攻して」おり「農学とは直接に関係のない事柄を研究して」いた(『明治文化史』5巻所収古島敏雄「明治の農学」<原書房 1979年>p387)。そのため「理学系統の優れた業績」が駒場の「学問的な雰囲気をつくる」ことに「役立った」とはいえ(同前 p388)、実験も農学関係のものは何もなく、「卒業論文も研究論文ではなく、夏休みにどこかに行って地方の作物を見たり、農家から話を聞いて、それをまとめて出すという程度」であった(『回顧録』p11)。

そうした帝国大学農科大学の講義風景の中で、オスカル・ケルネルの植物生理学は「緊張して勉強した」とのことである。ケルネルは明治14年にドイツから来日し、駒場農学校→東京農林学校→帝国大学農科大学で教鞭を取り、日本の土壌学、肥料学、農産製造学等の発展に多大な貢献をした。ケルネルの講義は英語で行われていたが、英語が得意ではなかった安藤は「上級生の筆記を借りて之を写して参考にし」ていた(『稲作史』p267)。ケルネルは明治26年に一時帰国したものの、明治27年まで滞在したので、安藤はおよそ2年ほどケルネルに接したことになる。

ケルネルのほかには安藤が影響を受けたのは農場長の斎藤万吉であった。斎藤の農作業の講釈にはかなりの注意を払っていたようであり、その頃の農場は「一種の会合場様の風で、予等はよく農場に集り草苺其他の生産物の御馳走を強請した」りして「和氣藹々であつた」とのことから(『稲作史』p267)、斎藤の人柄が偲ばれる。

(2) 斎藤万吉とのかかわり

安藤の先輩にあたる斎藤万吉はこの後深いかかわりを持つことになるので、その経歴を述べておく必要がある。斎藤に関しては須々田黎吉「斎藤万吉の思想と学問の形成過程-日本農政学樹立への途-」(『農林経済累年統計』3巻所収 農林統計協会 1975年)に詳しいので、それに依拠しながら展開していくことにしたい(以下引用にあたっては「斎藤の思想と学問」とする。なお、同稿には後に斎藤が勤務することになる国立農事試験場時代の動向までは触れられていない)。

斎藤は文久2(1862)年3月、陸奥国岩代にある二本松藩(現福島県二本松市)の藩士斎藤直温の長男として生まれた。安藤より9歳年上ということになる。その後明治10(1877)年1月農事修学場の予科に入学するまでの動向に関しては、斎藤の人物伝を課題としているわけではないので、ひとまず省略することにしよう。

農事修学場は明治10年2月内藤新宿試験場内に創設された教育機関で、東大農学部のもっと前身にあたる。斎藤は成績優秀であったため、6名の同期生とともに明治10年12月、繰り上げで農学科に進級することになった。6名とは斎藤のほか山本亀三、今井秀之助、谷口謙之助、小宮弥三郎、押川則吉であった。

その間明治10年10月農事修学場は農学校と改称され、さらに同年12月駒場に移転をした。翌年1月明治天皇の臨幸のもとに開校式が挙行されたが、この時農学校からさらに駒場農学校へと校名が改称されることになる。第1期生は2年後の明治13年3月に卒業したが、卒業生8名のうちには玉利喜造、牛村一氏、佐久間義三郎、佐々木善次郎等がいた。このうち玉利と佐々木は卒業後駒場農学校に残ることになる。また、玉利を除く3人は後の明治26年に国立農事試験場が創設されると、各支場長に就任することになるが、国立農事試験場の組織に関しては後述することにしたい。

明治11年3月に2期生が入学する。2期生は2年後の明治13(1880)年6月に卒業するが、卒業生数は22名であった。卒業生には斎藤万吉のほか横井時敬、酒匂常明、大内健、今井秀之助、山本亀三、押川

則吉、沢野淳、恒藤規隆等々がおり、そこには後世農学界に足跡を残す逸材が多数含まれていた。そのうち今井、山本、押川の3名は農事修学場で斎藤の同級生だった。

なお『駒場農学校一覧』(明治17年発行)によれば、2期生の卒業生数は16名となっている(p126～p127)。その差異は卒業生を成績によって甲と乙に分けて卒業証書を授与していたことによるものと考えられる。そのうち甲が16名で乙が6名であることから、前述の数字は甲と考えられる。

2期生の首席は横井時敬で2位が酒匂常明、3位が大内健であった。斎藤は22名中14位であった(順位は16名中としても同じ)。22名のうち、横井時敬、酒匂常明、大塚由成、沢野淳、恒藤規隆、三吉米熊の6名が後に農学博士を授与されている(『斎藤の思想と学問』p448)。ちなみに三吉の卒業順位は22位であったが、卒業順位とその後の研鑽とは別物ということになる。三吉は郷里の山口県を遠く離れた長野県の小県養蚕学校で校長職を勤めた(三好信浩『増補版 日本農業教育成立史の研究』<風間書房 2012年> p334)。

2期生が卒業する明治13年、イギリス人教師で化学が専門のエドワード・キンチの発案により、農芸化学科が設置されることになった。ちなみに駒場農学校のお雇い教師は当初すべてイギリスから招聘されており、明治9年10月に着任したキンチもその一人である。キンチは駒場農学校で農学講義、農場及び農業実践講義、農業実習、農事日記及び記簿法等を担当していた。2期生の殆どは卒業後さらに農芸化学科に進学したが、翌年キンチが帰国することになると大半の生徒は退学することになる。ところが、退学の理由が学業不振によるとのことであったため、抗議の意思表示をした生徒もいた。

その一人が大内健である。大内の農学科の卒業順位は横井、酒匂に次いで3位であったが、同期生の中では「最も弱齢であり」「すこぶる理数と文藻の才にたけた俊秀であった」といわれている(『斎藤の思想と学問』p448)。その後卒業生等によって明治20年11月に創設された農学会の幹事長に推されたほか、農学会が農学に関する研究機関の整備を要望して、明治24年1月に発表した『興農論策』の5人の起草委員のうちの1人として横井時敬、沢野淳等とともに加わっていた。大内はまた足尾鉍毒事件の究明にも多少かかわるなど、その後も活躍を期待されたが、ドイツ留学中に肺結核に冒され31歳で夭折した(『大日本農会報』153号所収「大内健」明治27年6月、同154号所収「大内健君小伝」明治27年7月を参照)。

斎藤も農芸化学科を中退した一人であるが、明治15年3月福島県の郡山農業学校に赴任することになる。そこには駒場農学校1期生の牛村一氏が勤務していた。牛村は後に国立農事試験場の宮城支場長を勤めることになるので、安藤や斎藤とも深い繋がりを持つていくことになる。その後斎藤は福島県尋常師範学校に移り、さらに上京して独逸協会学校(現獨協大学)でドイツ語を学び、ゴルツの農業経済学の研究に取組んだが(『回顧録』p19)、その研究は安藤に少なからぬ影響を与えることになる。

斎藤は明治25(1882)年6月(明治26年2月説もある)帝国大学農科大学に講師として勤務することになり、翌明治26年9月帝国大学農科大学助教授に任命される。その後明治32年4月に国立農事試験場に種芸部兼煙草部の技師として転出するまでの6年間、帝国大学農科大学の農場長を勤める一方で農政学(農業経済学)を担当した。帝国大学農科大学の農場長制度は明治23年に設けられ、初代の場長に東京農林学校農科簡易科(帝国大学農科大学乙科の前身で後の東京高等農林学校→現東京農工大学農学部)を卒業した富田直蔵が就任した。斎藤は富田の後を受け継いだことになる。

安藤は農学科に明治25年9月に入学したことは述べたが、『回顧録』によれば安藤は斎藤が農場長の時初めて面識を得たとあるので(p19)、面識を得たのは安藤が1年生の最期の頃か、もしくは2年生になってからということになろう。さらに、安藤の在学中の講義ノートにゴルツの名が度々見られることから判断すると、安藤が斎藤から影響を受けたのは斎藤の講義を受講してからとも考えられる。

安藤は斎藤が講義の種本として利用していたゴルツの『農政学』の入手にあたり、大変苦勞したことを述べていたが、それは安藤にとって深い関心を喚起するテーマであったことを意味していることになる。なお長崎常による同書の翻訳が刊行されるのは大正元(1912)年になる。安藤は後に第1次世界大戦後のヨー

ロッパに出掛けた際に、「経済に非常な興味を」示して「多数の書物を読」み込んだとあることから（「設立前後」p671）、その後も農政学（農業経済学）に関心を持ち続けていたようである。

また、先述したように斎藤の活動拠点でもあった駒場の農場が安藤にとって「一種の会合場様の風で」あり「和気藹々であった」ことから、斎藤に対して親近感を抱いていたとも思われる。それには既述したように斎藤の人柄も影響しているのかもしれないが、斎藤の研究の集大成でもある『農政学』はこの後明治35（1902）年に刊行される（「斎藤の思想と学問」p469～p470。その他、須々田黎吉「斎藤万吉の農政学」＜『農村研究』43号所収1970年＞を参照）。

先述したように、斎藤は明治26（1893）年4月創立の国立農事試験場に明治32年4月技師として転出していたため、『農政学』が刊行された頃は既に斎藤が帝国大学農科大学を退職していた頃であった。斎藤は種芸部長の森要太郎（明治20年農学科卒、明治29年農試に入場）が大日本人造肥料会社（明治20年創立）に入社したため、その後任として翌33年6月種芸部長に就任する（『稲作史』p313）。部制度については改めて述べる。

斎藤が活躍の場を帝国大学農科大学から移した国立農事試験場は、安藤がそれより前の明治28年から勤務していたので、その勤務先で安藤は斎藤と再び繋がりを持つことになるが、国立農事試験場の創立に至る経緯に関しては「国立農事試験場制度の成立」で論じた。そこで、本稿では多少重複することになるが、前稿で論じられなかった範囲に目配りしながら、行論の関係上必要な限りで論じておきたい。

2、明治20年代の農学界を巡る環境

（1）国立農事試験場の創立前史—沢野淳、林遠里の動向を中心に—

明治26（1893）年に国立農事試験場が創立されるまでに、明治初期にあって内藤新宿試験場を初めとする勸農試験場の設置があり、さらに重要穀菜試作地の設置（明治19年～明治23年、月日は不明）、農商務省農務局仮試験場農事部の設置（明治23年11月）があった。また、先述した明治24年1月発表の『興農論策』でも「農事試験場」に1章を割いて言及している。そうした試行錯誤の先に国立農事試験場の創立があったのであるが、この間中心的な役割を果たしたのは国立農事試験場の初代場長となる沢野淳であった。沢野は駒場農学校農学科の2期生であり、農芸化学科の1期生である。農学科の卒業順位は8位であったが、農芸化学科では首席であった。

沢野の構想についてはすぐ後で論じるが、農事試験場制度自体はいうまでもなく欧米の制度に倣ったものである。それは明治11（1878）年の遣米欧使節団報告書に、明治17（1884）年の『興業意見』に反映されていたことはいうまでもない。遣米欧使節団とは岩倉具実を団長に新しい国家建設のモデルを探るべく、明治4（1871）年11月～明治6年9月まで主にヨーロッパ、アメリカ等を巡回視察したものである。

その報告書のうち、農事試験場に関しては「欧羅巴農業総論」の項目の中で、「農学ヲ進メ理術並完カラシムルニハ」農事試験場の設置が必要と説かれている。そこでは「最モ農ヲ重ニス」るドイツでは全国に25箇所、フランスには3箇所のみである。農事試験場設置の目的としては動植物の性質、天候地味の関係等を「研窮発見セシコト」にあり、水土肥料の分析及び用法について実地の試験を行い、その結果を公に報告することであった（『明治前期勸農事績集録』下巻 長崎出版 p1622～p1631）。遣米欧使節団の報告書にみられる農事試験場に関する紹介はこの範囲であるが、それは使節団の視察対象が多様であり、視察すべき課題が他に多くあったことも一因と考えられる。

また、明治17年に農商務省から『興業意見』が刊行されていたが、それは「従来の政策過程を検討し直し、日本経済の現実を詳細に調べ、内外の政策的経験を参考にして、その後日本がとるべき政策方向を体系的に確立することをねらった、きわめて実践的課題を担うものであった」といわれている（『興業意見・所見 前田正名』「解題」p7 農山漁村文化協会1976年）。

そのうち「農業試験場ヲ設クル事」に関連する記述としては、「學術ニ基キ本邦実地ニ適當スヘキ農業新式ヲ定ムル為メ、左ノ科目ヲ試験講究スル事」とあり、植物栽培、牧畜、馬耕、農具、肥料など9項目が掲げられている。そして、「農業ノ改良」は「我国至大緊要ノ事件ナリトス。然レトモ此事タル、一朝一夕ノ業ニ非サレハ、遠大ヲ期シテ其目的ヲ達セントス。是レ該設ケヲ要スル所以ナリ」との解説が付せられていた（同前 p232）。

このような情報が沢野にも影響を与えていたことは容易に想像出来るが、遣米欧使節団報告書や『興業意見』に見られる農事試験場の紹介を、沢野がどのように受け止めたのかについて具体的なところは明らかではない。

沢野の経歴に関しては既に部分的に触れた。多少付け加えておくと、駒場農学校を卒業後一旦母校に勤務した後、明治19（1886）年農商務省農務局に移る。そこで駒場農学校で同期の酒匂常明や三老農の一人に数えられる船津伝次平（明治19年3月農商務省樹芸課に勤務）等とともに甲部農事巡回教師をすることになり、各地を巡回して農家に農事改良や技術普及の講話等を行った（この制度は国立農事試験場の創立によって廃止となる）。しかし、沢野は「講話説明せる事柄が果して実地に適し居るや否やを証拠立つべき試験場の設がなかりしたため、大いに不自由を感じました故に、是非試験場を設置せられんことを」関係者に建議した（『中央農事報』明治36年2月号所収「農事試験場の発達」p62）。その意見が即座に取り上げられることはなかったが、既述のようにその年沢野は民有地を借りて稲、麦、油菜等の試験、つまり重要穀菜試作地の設置を行った。

その後、農商務省農務局に仮試験場農事部が設置される前年の明治22（1889）年3月から1年間、福岡県在住の老農林遠里とともにドイツ、フランス、アメリカ、インド等主として先進国の農業事情を調査すべく外遊をすることになる。

林には外遊を詳細に記録した『懐中日記』があり詳しい旅程を知ることが出来るが、沢野に外遊の記録は見られない（あるいは残されていたのかもしれないが確認は出来ない）。沢野は帰国後の明治23年4月8日、農商務省において農商務次官をはじめ30数名の参加者を前にして、海外視察で得た情報を発表する機会を与えられた。それによれば外遊の第一の目的はドイツのハンブルクで開催された博覧会に立ち会うことであったが、洋行後沢野は外遊する前は西洋人の説を「一も二も賛成せしが今回航渡の上親しく其行為を一見してより以前の如く信ぜざる様になれり」と語っている。このことは欧米の農業事情を視察した結果によるものと考えられる。

というのは、アメリカ合衆国の首都ワシントンで農商務省の養蚕の試験を視察する機会を得たが、「其養蚕法の如きは拙なくして我国に比するに雲泥の相違あり」との感想を抱いたこと。あるいはウエストバージニア州の州都チャールストンで日本米の輸入が多く、また安価で売買することに現地では「驚き居る有様なり」と述べていたこと、等々によるものと考えられる（『大日本農会報告』105号所収「会員の帰朝」明治23年 p44～p46、『福岡日日新聞』明治23年4月16日付「農商上談話の大意」）。ただし、沢野の帰朝報告では農事試験場に関する情報を確認することは出来ないため、この外遊から欧米の農事試験場の実態をどのように認識したのかは明らかではない。

ちなみに、沢野はアメリカで日本からの輸入米が「往々腐敗するもの多きが夫につき領事等も大に憂慮し」ていた事を知った。それに対して、サイゴンやインドからの輸入米がアメリカで腐敗しないのは、米に「朶を交せ居れり」ためであることに気付き、今後は日本からの輸米についても朶糠を交せて輸出すれば「必ず好結果あらん」との感触を得ていた（「会員の帰朝」p45～p46）。

沢野の外遊に林遠里が同伴したことは述べた。林が詳細な外遊記録である『懐中日記』を残していたことも述べた。林も沢野と同様ハンブルクでの博覧会に出品説明委員補助として出向いたのであるが、その機会に欧米諸国の農業事情に関する視察も行っていた。林の日記によれば、旅程は明治22年4月25日に横浜を出発して5月10日にアメリカに上陸する。それから6月23日にイギリスへと渡った。その後翌23

(1890)年1月まで滞在したヨーロッパを離れて紅海、インド洋、シンガポール、サイゴンを経て3月23日に帰国している(『福岡県史』近代史料編「解説」p507 1992年)。

林も帰国後、沢野と同じく農商務省で帰朝報告をする機会を与えられた。そこで、林は「海外の商工農事は如何のものかと楽み行きしに本邦と大同小異にて著るきことなし」としつつも、「土地の広漠なるには一驚せり」とも述べ、日本に欧米の「耕作法を使用せんとするも到底出来得ざるべし」との感想を伝えた。さらに、欧米のように勸業に熱心であれば、「元来天然の気候地味宜きを以て彼の上に出つるも下るの気遣なし」と述べており(「会員の帰朝」p46～p47、「農商上談話の大意」)、沢野同様欧米に対する日本の劣位を感じてはいない。その他、外遊記録を見る限り、旅行の日程を詳細に記載してあることや、各地の情報を貪欲に吸収しようとする姿勢から、林がこの外遊を見聞を広める機会と位置付けていたようにも理解出来る。

そのような対応がその後の日本の農業の進展にどのような影響を与えたのかについてはひとまず置くとして、林に関して言えば、林は外遊から「何ものをも学ばなかつた」し、「この漫遊は農商務省の農学士連中が彼を忌避し」たため、沢野の洋行に「同伴させたものであつた」とする評価がある(小倉倉一『近代日本農政の指導者たち』農林統計協会 1953年 p3)。また、林自身「生きて帰ることはあるまい。俺は農学校長と議論の結果行くとじやから俺が賛成すれば行かんでもよいけれども。喧嘩の揚げ句、政府の金で視察に行つて来いというから視察に行くとじやから、途中で殺られる事は分つとるやね。つぶてでやるとじやけん生きて帰られんやね」(『農哲林遠里翁を憶ふ』所収「林翁追憶座談会」1934年 p42)との発言がある。

このような林の外遊に対する否定的な評価や発言は、林の帰朝報告に照らし合わせてみると、かなり異なった印象を与えられることになる。このことは本稿の課題と直接関連することではないものの、林を放逐することに外遊の目的があったとしたならば、そのような便宜と多額の渡航資金を林のために割く必要はあったのであろうかとの疑問が生じる。とはいえ、外遊を見聞を広める機会と捕らえた林が、その一方で外遊を死に場所と覚悟した本心が実際はどのあたりにあったのか。林はその頃既に、老農としての自身の先行きに不透明感を抱いていたのであろうか。この文脈からではいずれとも読み切れない。

それよりこの外遊は、当時の農学士連中つまり駒場農学校出身者と老農たちとの力関係を表現していたと考えるべきではなかろうか。というのは、駒場農学校が創立され東京農林学校へと発展していても、卒業生の力量はまだ十分發揮される場所が確保されてはいなかった。卒業生の就職先としては、1期生の場合既述したが玉利喜造と佐々木善次郎が母校に勤務したほかは、全て地方に就職の場を求めていった。2期生の場合も酒匂常明と沢野淳が母校に残り、大内健、今井秀之助、恒藤規隆等が農商務省の地質調査所(地質調査所は明治15年設置のため、その頃は前身の勸農局地質課と思われる)に採用されたほかは、1期生同様ほぼ地方に勤務地を求めていった。それも試験場や農学校であればまだましな方で、師範学校や中学校の教師になったものも多く「たいてい職を得るのに苦しんだ」のが実情であった(「斎藤の思想と学問」p449)。

この点に関しては、首席で卒業した2期生の横井ですら神戸師範学校に職を求めざるを得なかったのである。横井によれば「仕事はあっても老農崇拜熱の為め手が伸びず、此間に於て先輩等は幾多の苦心を重ね」ばならず(横井「駒場の回顧」<『講農会二十五年記念号』所収 1913年>p19)、その頃は「議論、学問が過度の信用を受けたる反動として……農学者連中が、如何に苦戦奮闘を要したであろうか、察するに余りある」と述べていたが(横井「出鱈目草」<『横井博士全集』5巻所収>p542～p543 1927年)、老農全盛期に苦汁を飲まされた横井の苦い経験がその後も尾を引きづっていくことになる。この点に関しては改めて論じることにしたい。

その頃は久保利通によって推進されてきた欧化政策が、久保の暗殺により品川弥二郎の勸農政策、所謂「老農起用の品川農政」へと変更されていた時期であった(『明治農書全集』1巻所収「解題」農山漁村文化協会 1982年)。明治14(1882)年3月に上野公園で開催された第2回内国勸業博覧会では最初の農

談会が開催されたが、そこには各府県から老農が集められていた。その目的は、明治政府が農業の実務に精通した老農の力量に期待するものであったことというまでもない。

それから10年近くが経過した明治20年代に入った頃、老農たちと駒場農学校→東京農林学校→帝国大学農科大学の卒業生たちつまり農学士連中との間に、まだ決定的な力量の変化は見られなかったと考えられよう。林の外遊には農商務省側に放逐の意図があるいは含まれていたのかもしれないが（そうした勢力の存在があったことは考えられる）、老農の力量が当時の農業の実務に依然として必要不可欠であれば、外遊には老農の力量に依存せざるをえない思惑が込められていたと考える方が、むしろ妥当な解釈であるとはいえないか。

そのことは沢野の見解にも見え隠れしているといえよう。というのは国立農事試験場が創立される前年の明治25（1892）年、東京府京橋区木挽町の厚生館で沢野は「農事試験場の仕事」と題する講演を行っていた（10月以前であるが講演日は不明）。そこでは「今日本邦の農業は、如何なる程度に於てあるかと申しますれば、諸君も御承知の通り、本邦は古来農業国で、日本固有の農業法には随分熟達せるもの様では御座りますなれども、尚老農の実験と学者の研究を土台となし、之が改進の道を講じますれば、前途遼遠大に改良すべき点は多々あることで御座ります」と述べていた。そこでは「学者の研究」と同時に「老農の実験」の必要性をも指摘していたが、それはそのまま両者の力関係を示すものであったともいえるであろう（『大日本農会報告』155号所収「農事試験場の仕事」明治25年p1）。

その一方、沢野は老農によって進められる農事改良に対する疑問をも呈していた。同じく沢野は「農事と申しますものは工業や医業などとは其趣大に異なり」気候、土質、民情等に「大なる関係のあるものであるため、「一ヶ所や二三ヶ所の試験の成績を以て、日本全国に推し及ぼすとは拙も出来」ない。さらに、欧米に「何ほど益の多い農作物、若くは極めて巧なる耕作法」があったとしても、それを「直に之を日本に移して用ふることは出来」ないのと同じく、「九州で上手な実地農家は、北海道に行つても上手な実地農家と云ふとは請合はれませぬ、又四国に利益の多い農作物は、必も奥羽地方に利益の多い農作物でありませぬ」ので、「農事試験場は沢山設けねばならぬ」と説いていた（「農事試験場の仕事」p2～p3）。

そこでは老農との関係を重視するとともに、その一方老農に対する批判をも行いつつ、農事試験場設置の必要性について力説していたのであるが、講演題目が「農事試験場の仕事」であることから、沢野の主張は老農との関係を論じつつも、力点は自ずと農事試験場の設置にあったと考えてよいであろう。実際、沢野は講演で農事試験場の全国的な設置構想を提示していた。それは「気候、土質、民情等を斟酌し」つつ「全国を9農区に概別して」いる（9農区の区割案については「国立農事試験場制度の成立」で論じたので、ここでは略す）。とはいえ沢野は「例へば」と前置きしているように、それはまだかなり大雑把なものであったと考えられよう（「農事試験場の仕事」p3）。

この前年の明治24（1891）年1月既述したように『興農論策』が発表されて、農事試験場設置の必要性が説かれていた。そこでは「全国農事試験場制度」として、中央試験場が1カ所、地方の農区試験場が5カ所、府県試験場附試作地が各府県1カ所以上というものである（『明治前期勸農事績集録』下巻 <長崎出版1975年>p1774）。その起草委員の1人が沢野であったことも述べたが、地方の農区の区割案は厚生館での講演内容で示された1農区よりも、区割が広範囲に及ぶものであった。したがって「概別」であったとはいえ、厚生館の講演で示された9農区の区割案は、短期間ではあっても沢野が具体的な検討を重ねていたことを示すものであるといえよう。

（2）帝国大学農科大学の卒業と就職事情

沢野が「農事試験場の仕事」で農事試験場創立に向けての主張を展開していた同じ年の明治25年9月、安藤は帝国大学農科大学農学科第1部に入学することになる。同期生には後に忠犬ハチ公の飼い主として知られる上野英三郎（三重県出身）をはじめ、赤星朝暉（熊本県出身）、松隈（古賀）孝久（佐賀県出身）等

がいた。3年後の明治28年9月の卒業時に14名を数えるが、入学時の人数は特定できない。

入学してからの授業風景については既に述べたが、若干付け加えておくと農学科の範囲は「頗る広汎多岐に」にわたり、「其専門部面例へば作物とか養蚕とか植物病理、害虫駆除と云ふ様な方面に専門的になるのは」2学年の3学期からであった。それでは専門領域を学ぶのに遅いと判断した安藤は、友人たちを誘って松井学長に科目編成を申し出たが、松井は「現在でも農学士は就職容易でないのにそんなに専門的に狭くなれば食ふ道はない」と説得された。そのため安藤は3、4人の友人とドイツの農業雑誌を購入して回覧した。購入費用は学生たちが自己負担をしたのであるが、この購読は専門の「知識を増したのと語学の上でも相当利益した」と述べている。

また、安藤は2年生の時、つまり明治26年9月に講師として赴任していた横井時敬の講義を受けることになる。安藤は横井の栽培汎論の講義を「面白く聞いたが之に多くの時間を要し」たため、作物学の講義は稲作のみであったと述べている。稲作の講義について安藤がどのように受け止めたのかは明らかではないが、稲作の研究は安藤の生涯にわたるテーマとなっていく。その方向付けをしたのは横井であったということにもなる。さらに横井は農学実験で試験研究の必要性を説いたのをはじめ、教室でも発芽試験などを始めた。それは安藤等同期生たちが試験法の手始めを習った最初であった（『稲作史』p267～p269）。

安藤が横井から受けた講義風景についてのエピソードが残されている。横井が使用していた種本は、「支那」の『欽定授時通考』と百姓伝記とウオルニーの栽培論の3つであった。安藤は横井からウオルニーの本を借りて読んでみると、横井の講義内容と異なったところがあったので横井にその点を質した。その間に対して、横井は逆に安藤が何年間ドイツ語を勉強したのかと問うたので、安藤は3年間勉強をしたと答えた。横井は1カ月しかドイツ語を勉強していないから、安藤の指摘の方が正しいと答え、「率直に」自らの「間違い」を訂正した。横井は誤訳をしたわけであるが、この時の安藤が示した横井に対する反応は「僅か一カ月位独逸語を勉強せられて独逸語の本を種本として講義されたのは全く精力絶倫の証である」と、むしろ横井の才能に敬意を表していた（『近代日本農政の指導者たち』p27。著者の小倉氏は出展として『大日本農会報』の後身に当たる『農業』639号<1934年>を挙げているが、同誌及びその前後の『農業』誌にも該当する記事は確認出来ないため出展は不明）。そして、安藤もまた曾て英語の克服に苦勞した時期があったが、この頃には友人たちとの洋書購読による鍛練を経て、横井と渡り合えるだけの語学力を身に付けていたことになる。

大学での授業のほか安藤は2年生が終わる7月から8月にかけてほぼ2カ月間、数人の同期生と九州の旅行に出掛けた。その旅行は観光も兼ねてはいたが、目的は九州地方の農業視察である。先述した佐賀県知事の田辺輝実と再開したのもこの時である。鹿児島県の国分では煙草栽培の視察、宮崎県では県庁で農業事情の説明を受けたほか灌漑施設や甘薯栽培の視察をしている。その他の県でも農業の特産品等を見聞している。

明治27年の9月、3学年になると安藤は特待生となり学費を免除された。3年生の1年間は卒業論文の執筆に専念する。選んだテーマは種子の発芽に必要な水分の吸収量、稲麦種子の比重選の効果の解明であった。そのテーマは横井と深く関連していたことから、横井の研究室で一緒に昼食を取ることも多く、「時には議論に花が咲き思わず時を移すこともあつた」ほどであった。そのような関係もあって、卒業後も「永く」横井「先生に親しむの機会を得」ることになる（『稲作史』p275）。

安藤は明治28年7月に卒業する。農学科の卒業生は既述したように14名で、卒業順位は1位が上野英三郎で安藤は2位であった（『大日本農会報』168号「雑録」明治28年9月）。上野は後に東京帝国大学農学部の教授となり、酒匂の土地改良論を農業工学として大成させることになる（『近代日本農政の指導者たち』p66）。

その頃の就職事情について、安藤に言わせれば「てんで口は」無く「誰もどこに世話をしてくれるということ」もなかった。唯一岡山県の師範学校で博物のポストがあったため、同期生で「どうするか」相談した

結果、父親を亡くしたばかりの赤星朝暉に譲ることにした。そのような事情でもあったため「みんなどうやらこうやら落着くの一年以上かかった」とのことであった（農業発達史調査会『維新以後の農業教育・農村史・老農について』p13 1950年。以下『維新以後』と略す）。ちなみに赤星の卒業順位は7位である。

安藤は在学中長期間に及ぶ研修旅行に出掛けたり、就職にあたり「一年くらい口がなくても、のんきなもので」あって「自分では、これから大いに農業技術の向上をやるんだ」と述べていたことから（『回顧録』p13）、かなり余裕のある（つまり十分な仕送りのある）学生生活を送っていたことが考えられる。安藤の場合はそうであったかもしれないが、友人の全てがそうであったわけではなく、就職事情は「相当にきびしい中で行われ」たのが実情で（『回顧録』p186）、赤星の事例が真相を語っているといえよう。

安藤は卒業時に横井から「手伝として学校に残れば「手当は月六円は出せるとの話」を受けたが、「学校に残つても」将来の見込は皆目分らず、予の素地たる実地的試験研究の遂行も困難なるかは明かなること（『稲作史』p276）。さらに「大学の象牙の塔に残って、たんに学理の研究に埋もれるよりは、農業の実際の場において技術研究を深めて、農業の振興と農民の福祉に貢献したいということを、当時すでに、心に決めていた」ことから（川井一之「育種試験の近代化と安藤広太郎博士」＜『農業技術』1974年6月号所収＞、後に川井『近代農学の黎明』明文書房 1977年に再録）、そのポストを他人に譲ることを申し出た（代りが誰かは不明）。

横井は安藤に対しては好意的であったようであるが、その安藤でも横井が同期生たちの就職を「一向」に「世話してくれない」ため、「われわれのクラスで」は横井の「評判が悪」かったとの感想を抱いていた（『維新以後』p12）。また、横井が博文館の農学全書を作ることになったので、24、5年頃に卒業した農「学士連中がみんなで引き受け」ることになった。その際原稿料が50円であったが、序文を書いただけの横井が15円も貰ったのは「けしからぬとってブウブウ言っていた」とある（『回顧録』p23）。これらのことから横井の人物像の一端を窺うことが出来よう。

その頃の安藤の意中の就職先は、2年前の明治26年に創立した「西ガ原」つまり国立農事試験場であった。安藤にとってそこそが「予の素志たる農業の発展に力を致さんには研究の出来る所」であり、「農業の振興と農民の福祉に貢献」する所にほかならなかったのである。しかし同場は「無論当分俸給は貰えるものではなく無給は覚悟しなければならなかつた」のが実情であった（『稲作史』p275～p276）。

安藤はその意志を農商務省農務局農事課長の渡辺朔に伝えるとともに、郷里に戻り父親に対して国立農事試験場に勤務する意志を伝えるとともに、当分の間無給となるため従来通り生活費の仕送りを依頼していた。ちなみに渡辺は明治13年農学科（2期生）を卒業した後、ドイツに留学してゴルツの農業経済学を学んだ人物である。安藤は在学中に九州へ長期間の旅行をしたり、卒業後もなお親元に仕送りを要求していたことから見て、先述したことであるが安藤家は財政的にはかなりゆとりのある家庭であったことが窺われる。したがって、卒業後一年くらい就職口がなくても「のん気」に構えていられたのは、安藤の個人的な事情に起因するところが大きであったことも先に述べた通りである。（以下続く）